ハンセン病療養所付設火葬場の歴史的変遷に関する研究

HISTORICAL CHANGE OF CREMATORIUMS ATTACHED TO SANATORIUMS FOR HANSEN'S DISEASE

浅香 勝輔*

Katsusuke ASAKA

In Japan is a total of sixteen sanatoriums for Hansen's disease, including national and private facilities. This paper reports a historical study of the crematoriums used at the death of patients in those sanatoriums. In former times, each of many sanatoriums had a crematorium of its own as an attached facility, and this state has been studied in detail. It is then pointed out that in these days, the use of a nearby public crematorium is increasing because of the decrease in the discriminative and prejudiced view of the general public. The special circumstances as to the four national sanatoriums still preserving attached crematoriums, have also been investigated.

Keywords : crematorium, sanatorium, district facilities

火葬場, 療養所, 地域施設

1. 問題提起と課題

ハンセン病はかつて「らい病」と呼ばれた。抗酸菌の一種であるらい菌の感染によっておこる慢性伝染病で、おもに皮膚と末梢神経が侵されるが、遺伝病ではない。菌を発見したハンセン¹⁾の名をとってハンセン病という。

明治33年(1900)には、わが国に3万人ほどいた患者も、昭和18年(1943)に発見された優れた特効薬プロミン²⁾によって、治る病気となった。治療法が確立された今日では、早期に発見し治療すれば治癒し、社会復帰も十分可能である。

近年わが国のハンセン病患者数は、平成3年12月31日現在7130人で、新たに発生する患者は、昭和30年(1955)には412人だったが、平成3年には17人と激減している。患者数7130人のうち、療養所に入所患者は6422人(国立6357人、私立65人)、在宅患者は708人である。国立療養所では在園年数30年以上の長期療養者が70%を占めている³⁾。

過去において、世間にはハンセン病に対し、遺伝病・不治の病などの偏見や差別があった。大正初期以降、わが国で国策として強制隔離主義が採られた。その主役が光田健輔⁴⁾で、近年、光田の主導した終生隔離によるハンセン病対策を光田イズムと呼んで、非難する声強い。光田の採った方策は、確かに多くの問題があり、人権上の疑義も少なくない⁵⁾。光田が園長であった長島愛生園

の女医であった小川正子が著し、ベストセラーとなり、映画化までされた『小島の春』⁶⁾も、今日では強制隔離時代の紀行文にすぎないと断じられている⁷⁾。だが、国家がハンセン病対策の遂行に十分な予算を与えなかったという事実との関係も、見逃してはならないであろう⁸⁾。

ともあれ、昭和52年から平成4年まで邑久光明園の園長を勤めた原田禹雄氏が、「らいを病む人と精神病を病む人を、一般的にどう処遇するか、ということは、その国の文化を測る上での指標となり得る。残念ながら、日本は、らいを病む人々に対して苛酷であった」⁹⁾と述べているのが至言であろう。そして今日もなお、日本の人たちはハンセン病に対して、いわれもない偏見と差別を捨て去っていないと思われることが多いし、治癒者の社会復帰の道はきわめて険しい。

小稿で筆者が立てた目標は、以上のような経緯を踏まえて、すべての国立らい療養所¹⁰⁾・私立の療養所での付設火葬場の歴史的変容と、現在の火葬の実態を究明し、何らかのかたちで今後の計画への示唆を提出したいことである。先行研究も皆無で、まだ研究者が着目しておらず、建築学的にも境界領域として残されていて、今後開拓されるべき課題と考えられるので、それなりの再評価をし、次いで計画としてどう取り上げたらよいか、若干の提言をしたい。今日、記録にとどめておかなければ、後発研究はおろか、この主題は永遠に喪失してしまうのではないかという責務にかられる。十分な文献・資料の

* 日本大学理工学部大学院不動産科学専攻 文学修士・博士(工学) Dept. Real Estate, Science & Technology Nihon Univ., M. Litera., Dr. Eng.

表—1 ハンセン病療養所一覧

療 養 所 名		所 在 地	開設年月	付設火葬場の有無
国 立	国立療養所 松丘保養園	青森県大字石江字平山 19	昭和42. 4	△
	〃 東北新生園	宮城県登米郡迫町新田字葉の木沢 1	昭和44. 10	△
	〃 栗生楽泉園	群馬県吾妻郡草津町乙 647	昭和 7. 11	△
	〃 多磨全生園	東京都東村山市青葉町 4-1-1	昭和42. 9	△
	国立駿河療養所	静岡県御殿場市神山 1915	昭和19. 12	×
	国立療養所 長島愛生園	岡山県邑久郡邑久町虫明 6539	昭和 5. 11	△
	〃 邑久光明園	〃 虫明 6253-1	昭和42. 4	○
	〃 大島青松園	香川県木田郡庵治町 6034 畧	昭和42. 4	○
	〃 菊池恵楓園	熊本県菊池郡合志町栄 3796	昭和42. 4	△
	〃 星塚敬愛園	鹿児島県鹿屋市星塚町 4522	昭和10. 10	○
	〃 奄美和光園	鹿児島県名瀬市有屋 1700	昭和18. 4	○
	〃 沖縄愛楽園	沖縄県名護市字済井出 1192	昭和13. 11	△
	〃 宮古南静園	沖縄県平良市字島尻 888	昭和 6. 3	△
私 立	財団法人 神山復生病院	静岡県御殿場市神山 109	昭和22. 5	×
	〃 身延深敬園	山梨県南巨摩郡身延町 3636	昭和39. 10	△
	社会福祉法人 琵琶崎待労病院	熊本市島崎町 6-1-27	昭和31. 10	×

(昭和44年8月31日現在)

〔注〕 付設火葬場が、○は現在も有るケース、△は過去に有ったケース、×は開設以来無かったケース。

裏付けをもつとともに、踏査によって自分で確かめ、じかに触れた観察・所見を豊富に盛り込み、一般社会から隔絶されて、その閉塞されがちな社会のみで火葬場を保有せねばならなかった歴史的実状を、筆者がこれまで研究してきた常態の火葬場の研究を基盤として、具体的にさぐるという方法をとった。そのために、できるだけ即物的な事実の提示によって実証研究を進めたい。

さらに留意しておきたいことがある。ハンセン病は、皮膚と末梢神経に病変を生じ、病気が進行すると外形が醜くなり、身体障害を残す、などの特徴があるため、有効な治療法が無かった時代には「業病」とされていた。一方では大正初期からの国策により、患者は生涯を通じて絶対に隔離すべきであるという「強烈な伝染病」説が植え付けられた¹¹⁾。こうして伝統的な「業病」観の上に、近代的な「伝染病」観が重ね合わされたのである。

そうした社会的背景を十分念頭において、ハンセン病がようやく終息しようとしている今日、これまでのハンセン病療養所の生々しい歴史の中で、なかなか全体像が分からなかった付設火葬場の実状を、健常者が想像もで

きずに見落としていた付設火葬場という建造物を、改めて文献・資料や構造物から検証し、一つの時代構成の中に位置づけた。

また、療養所によって、文献・資料などの記録の有無や繁簡の差もなかったわけではないが、見逃されていた施設の画期を重点的に理解し、叙述の適正をはかっていきたい。なお、固有・独自といった感性的把握もあるであろうことを、断っておきたい。また、かつて各地に所在した結核療養所の付設火葬場の事情については、稿を改めて論じたい。

ところで、国立療養所の入所患者の平均年齢は、67.8歳（平成4年5月1日現在¹²⁾）と高齢化し、成人病等の合併症による死亡者が増加している現在、付設火葬場という施設のあり方も、大きな変転期をむかえている。そうした情勢を踏まえて、これからの計画のあり方を、廃絶と存続の二つのケースに分類のうえ、提出したい。

2. 療養所付設火葬場の経年変化

現在、わが国のハンセン病療養所は、国立13か所、私立3か所、計16か所である。そのすべてを表—1

に示し、併せてそれぞれの開設年月、そして小稿の主題となる付設火葬場の所在状況を表出した。国立療養所の場合、その付設火葬場は、過去に所在したものも、現存するものも、厚生省の所管で、すべて国有財産である。

国立療養所のうち最北端にある松丘（まつおか）保養園には、大正5年（1916）から火葬場ができ、昭和29年（1954）に改築、昭和38年（1963）に廃止されている。「昭和三十八年十二月十五日、園内の火葬廃止、青森の火葬場で行なうことになる」¹³⁾との記録がある。実際に建物を取り壊されたのは昭和51年（1976）2月10日であったが、その直前に撮影したものが写真—1で、この跡地には慰霊の塔が立てられている。

東北新生園では、開設直後の昭和15年（1940）8月10日に火葬場が建てられている。昭和43年（1968）11月30日に廃止されるまで、その建物に変化はなかったが、木造平屋建て瓦葺き、建面積33m²であった。廃止後は使用されないまま放置されていたが、それを撮影したものが写真—2で、この建物も昭和63年10月19日に取り壊されている。

写真一 松丘保養園付設火葬場（昭和51年1月28日）

写真三 栗生楽泉園付設火葬場跡の供養碑（昭和63年6月5日）

写真二 東北新生園付設火葬場（昭和63年8月24日）

写真四 多磨全生園付設火葬場跡の碑（昭和60年11月4日）

栗生（くりゅう）楽泉園には、昭和10年（1935）から昭和39年（1964）まで、写真三の現在では供養碑の立っている場所に火葬場があったが、子細な記録を探索することはできない。

多磨全生（ぜんしょう）園では、「火葬場は大正12年の震災で倒壊」¹⁴⁾との記録があるから、関東大震災以前にすでに付設火葬場が所在していたことが分かる。その後、再建された火葬場が所在していたことは、古くからの入園者からのヒアリングから分かるが、いちばん新しい施設は昭和22年（1947）から昭和40年（1965）12月まで、現在の「のぞみの園」の碑がある場所に所在していたことが、その碑の裏面の刻銘（写真四）によって判明する¹⁵⁾。しかし、建造物の記録は探索できなかった。

国立駿河療養所は、第二次世界大戦末期に、戦地でハンセン病に罹病した軍人のために開設された歴史を有する。そのため開設当初より付設火葬場を保有しなかった

唯一の国立らい療養所である。現在では、御殿場市の公営火葬場を利用している。

長島愛生園が開設後、いつごろから付設火葬場を有していたかは、今日に至っては不詳である。ただ「昭和四十一年九月二十八日、万霊山の火葬場を廃止し、光明園の施設を共同使用とする」¹⁶⁾とあるので、その廃止年代の見当はつく。

上の記録で「光明園」と記載されている邑久（おく）光明園は、長島愛生園と同じ長島の西寄りに所在する。邑久光明園は、昭和13年（1938）4月、現在地に移転して開設されたものである。もとは明治42年（1909）4月に、当時の大阪府西成郡川北村大字布屋（現在の大阪市西淀川区中島2丁目、トーメン建材リースの所在す

写真一五 邑久光明園付設火葬場 (平成4年8月20日)

る一帯)に、外島保養院として開設されたものであった。開設後まもなくの資料に、「患者地域の南東部約一町七反歩は農地と火葬場、ごみ焼却場などのある地で、そこまで出ると遠く大阪市の空が仰がれた」¹⁷⁾とあるから、外島保養院の時期にも、すでに付設火葬場が存在していたことが分かる。しかし、昭和9年(1934)9月21日の室戸台風の襲来で、施設はすべて倒壊または流失した。その代替施設として、光明園と改称し、現在地に開設した経緯を有している。「大阪外島保養院でも光明園でも、開園と同時に建造されていたものに、霊安室と解剖室、それに火葬場があった」¹⁸⁾という記録から、現在の写真一五の火葬場がそれであることが裏付けられるが、これは昭和30年(1955)3月に現存のものに建て替えられている。この火葬場が昭和41年(1966)9月以降、上述のように同じ長島に所在する長島愛生園の火葬をも引き受けている。建物の平面図が図一1で、木造平屋建て瓦葺き、建面積37m²、炉数1基である。この火葬場を共用する邑久光明園と長島愛生園の、平成に入ってから火葬件数は表一2のとおりである。

大島青松園では、昭和53年(1978)12月15日に、現在使用している鉄骨ブロック造、壁面がモルタル刷毛引アクリルリシン吹き付け平屋建て、建面積が50m²で炉数1基の付設火葬場が、同園の所在する大島の北端に完成している。その現況が写真一六で、平面図を図一2に掲出しておく。それ以前の火葬場は、現火葬場に南接した地にあつて、現在もなお、写真一七のように、建物と煙突を残したまま廃屋となっている。

菊地恵楓(けいふう)園には、昭和4年(1929)4月から昭和38年(1963)11月21日まで付設火葬場が所

写真一六 大島青松園付設火葬場 (平成3年6月18日)

写真一七 昭和53年まで使用していた大島青松園付設火葬場の廃屋 (平成4年8月9日)

図一1 邑久光明園付設火葬場の平面図

表一2 邑久光明園と長島愛生園の火葬件数

	光明園	愛生園
平成元年	14 件	23 件
〃 2年	14 〃	14 〃
〃 3年	14 〃	24 〃

(平成4年3月31日現在)

在したという記録があるのみで、その詳細については、もはや探索不可能である。

星塚敬愛園の付設火葬場は、現存する国立療養所付設火葬場のうち、最もしょうやかな近代的な建造物である。鉄筋コンクリート造、平屋建て、建面積 93 m² で、炉数も 2 基ある。その平面図と立面図をそれぞれ図—3・図—4 に掲出しておく。昭和 58 年 (1983) 3 月に完工をみた

図—2 大島青松園付設火葬場の平面図

図—3 星塚敬愛園付設火葬場の平面図

図—4 星塚敬愛園付設火葬場の西側立面図

ものである。

奄美和光園には、昭和 26 年 (1951) 3 月より付設火葬場がある。木造平屋建てトタン葺き、建面積 23 m²、炉数 1 基の小規模なものである。しかし、火葬炉から炎が噴き出して危険なため、廃止はしていないが現在は使用していない。その平面図は図—5 のとおりである。代替施設として名瀬市の公営火葬場を利用している。

沖縄愛楽園には、昭和 37 年 (1962) 8 月 6 日から平成 3 年 9 月 25 日まで付設火葬場が所在したが、取り壊されている。記録・資料の提示、調査などに一切応じてもらえない。

宮古南静園には、昭和 43 年 (1968) 10 月に鉄筋コンクリート造、平屋建て、建面積 44 m²、炉数 1 基の付設火葬場が建てられたが、建物の意外に早い老朽化等によって昭和 61 年 (1986) 12 月で使用を中止しており、建物はそのまま放置されているが、平成 4 年度中に取り壊される予定である。

次いで私立の療養所の付設火葬場であるが、神山（こうやま）復生病院は、フランス人神父テスト＝ウィッドが設立したものである¹⁹⁾。開設以来、付設火葬場を保有していなかった。当初は土葬であったが、その後昭和 40 年代初期より、国立駿河療養所と同じく御殿場市の公営火葬場を利用して現在に至っている。

身延深敬（じんきょう）園の設立事情は、『財団法人身延深敬園概況（平成 4 年 3 月 31 日現在）』に、次のように記されている。

明治 39 年の夏、日蓮宗僧侶故綱脇龍妙が初めて身延山に参詣した時、山門付近の路傍から河原にかけて幾十人のらい患者群が悲惨なる生活をなしているのを目撃し、殊に其中の一少年が聞くに耐えぬ哀極まる物語をして取りすがって泣き叫び窮状を訴えたので、そのまま去る事を得ず煩悶懊悩幾日の後、漸く決心して救済を思ひ立ち、時の身延山法主豊永日良上人の賛助を得て、同年 10 月 12 日仮病室を建て患者 13 名を身延河原より収容し、事務所を清々寺の一隅に置き、医務を開業医遠藤源十郎に依頼、法華経常不経菩薩品の色読〔ママ〕を生涯の指針としていた綱脇龍妙は、この一節より、身延深敬病院と名称を決め発足した。これが創立である。

図—5 奄美和光園付設火葬場の平面図

写真—8 身延深敬園付設火葬場（平成4年7月31日）

写真—9 身延深敬園付設火葬場の火葬炉（平成4年7月31日）

ここには昭和34年（1959）から付設火葬場があった。それ以前は野焼き、それより前は土葬であったという。木造平屋建てトタン葺き、建面積23㎡の建造物は、写真—8のとおりである。この火葬場は入園者の手造りで建てられ、燃料は薪、現在も使用可能で、その炉前状況は写真—9のとおりであるが、昭和61年（1986）より使用しておらず、現在では身延町の公営火葬場を利用させてもらっている。当園の創設者である綱脇龍妙の子孫である現園長の綱脇美智女史が、筆者に、「らい療養所の火葬場は、らいが如何に嫌われたかの一つの証言かも知れません」と述べられた言葉の重みが忘れられない。ちなみに、この療養所は、医学の進歩によるハンセン病患者の減少に伴い、目的を果たしたものと考え、平成4年度末をもって90年に及ぶハンセン病療養所を閉鎖することになった。平成5年度より、現在の社会が必要としている重度身体障害者のための身体障害者療護施設を開園することにし、社会福祉法人の設立中である。

琵琶崎待労（たいろう）病院は、私立カトリック療養所である。カトリックは死者を葬るために土葬がならわしであったので、昭和31年（1956）までは全員土葬であった。墓地は療養所より2kmほど離れた山中にある。墓地の広さは2221㎡で、各死者のための墓標は十字架を立てた。初期は木製、中期は腐食を防ぐためセメント

の十字架を立てたが、昭和53年（1978）ごろになると、十字架も150余りとなり、土地も狭あいとなったので、十字架を取り、同年8月墓碑および墓地整備工事を施行し、昭和58年（1983）1月に納骨堂が完成したので、霊樹山カトリック墓地と命名し、墓地公園にしている。その時点で、それまでの土葬による死者の骨を拾い、火葬に付し、新しくできた納骨堂に納めている。以来、死亡者が出たときには、熊本市の公営火葬場で火葬し、納骨堂に納めている。

3. ハンセン病療養所火葬問題の新しい地平

前項のような付設火葬場の歴史的消長のなかで、近年に至るまで、火葬に従事するのは、入園患者のうち軽度の人たちが当たったという記録が多い。

青森の松丘保養園に勤務されていた厚生技官の故・牧方勇氏が、筆者の研究のために、昭和56年（1981）4月、古くから入園していた当時80歳の男性患者から聞き取ってくださった、詳細な火葬場に関するヒアリングがあるが、それを要約しておく。

大正5年（1916）、患者定員60名になったとき、ようやく療養所らしい建物もでき、同じくして付設火葬場もできた。まだそのころは医療設備も完備せず、栄養状態も悪く、医療従事者の人手不足などで、収容患者のうち毎年10%ほどの人が死亡していった。特に流行性感冒などが発生すると、その数が20%に及んだ年もあった。死亡患者の遺体はすべて解剖に付されたのち、患者たちの手によって火葬された。火葬には比較的元気な人が輪番制で当たり、1回の火葬に3名が従事した。昭和初期の療養所は自給自足制を一部に採用しており、畑作に従事する患者の1日当たりの作業賃は1銭5厘であったが、火葬従事者には1回につき20銭が給付されている。ちなみに、刻み煙草の「なでしこ」が1袋30銭のころのことである。

第二次世界大戦の終戦前は、青森市の火葬場も不備で、療養所の職員やその家族の中でも、亡くなった場合に、この付設火葬場で火葬してもらう人もあった。初代園長の中條資俊氏などもこの火葬場で茶毘に付された。また療養所の近隣（当時の新城村）の村民も、ときにはこの火葬場を利用したという。戦争によって食糧事情がひどい悪化しつつあったころでもあり、村民の火葬場利用のときには、遺族たちが労をねぎらってくれたり、供え物がもらえるなど、いくばくかの魅力もあったので、火葬に従事することを希望する患者も結構多かったということである。

終戦後は、昭和22年（1947）に新薬プロミンの使用が開始されるとともに、死亡者の大半はハンセン病そのものが死因でなく、老衰や一般疾病によるものがほとんどとなった。数える程度ではあるが、若い患者の中には将来を悲観して自殺した者もいて、惜しまれながら療友の手によって、この火葬場で火葬された例もあったという。火葬された患者の遺骨はほとんど引き取る者がなく、すべて納骨堂に納められた。

昭和24年（1949）、初めて入園患者たちに公職選挙法による選挙権が与えられたのを契機に、患者の人権の尊重が叫ばれるようになり、全国の国立療養所の患者たちが決起して全患協を組織、らい予防法の改正を前面に、社会人なみの処遇

改善を要求するなかで、当時の革新系の青森市長の決断により、昭和38年(1963)12月15日付で、青森市営火葬場の使用を認められるに至った。療養所付設火葬所の老朽化と、火葬従事者が集まらなくなったことが、反面の理由であったともいう。

しかし、ハンセン病に対する世間の偏見はなお強く、市営火葬場とはいえ、新しい火葬場が完成して以来使われていなかった油川の旧火葬場を、松丘保養園の死亡患者専用としたのである。それから10年。青森市の人口も26万と増加するにつれ、新しい火葬場もはや手狭となり、また、市の郊外へと住宅地が広がるにつれて、市の中心部に火葬場が取り残されるかたちとなった。昭和47年(1972)9月、現在の菅谷の地に青森市斎場が完成して移転したのを機に、松丘保養園の死亡患者も、同所で火葬されるようになった。火葬料は一般の青森市民と同様、全額無料である。

東北新生園の記録は、もっと生々しい。同園には付設火葬場が所在したのは昭和15年から43年までであるが、同園の入園者自治会が編集・発行の『忘れられた地の群像 東北新生園入園者自治会四十年史』(昭和62年、pp.29~31)に、次のような一節がある。

新生園の西南地で地方部落の境界ぎりぎりに火葬場があった。〔中略〕火葬場方面は細道であり、柩を四人で担ぐのであるが、冬季には特に難儀しながら、亡き療友を葬ったものである。〔中略〕

火葬となると、どういう訳か必ず夜にかかってしまう。冬の季節の夜八時は、寒気はきびしくなり、この道路は土工係が無報酬で造り直したものである。

この火葬のしかたについては、他の療園から転園してきた経験者が居て適当に指導した。しかし、指導を受けて直接手をかけるのは、地方出身の若者でこんなことは見たこともなく、脅えるのは当たり前である。薄気味悪く、出来るならこの仕事から逃げ出したい。先輩から気合いをかけられ脅えつつ仕事をする。薪で火葬をするのであるが、ある程度の時間が経つと、覗き穴から死人の焼け具合を見る。係員4、5人で状況を語り合い、ときによっては林の中から、長い木を伐ってきて、死骸を突つき焼き易いようにする。このようなことになると新参者には腰が抜ける思いで、どんなに叱られても出来ることではなかった。しかし繰り返し何回かたずさわると慣れてくる。一昼夜に三人も亡くなると火葬場も忙しくなる。腹這いにした方が焼け易いと云えば、仏様には遠慮なく腹這い火葬となる。時間が経って覗き穴から見ると、真黒い顔が覗き穴より、□□²⁰⁾焼きをうらめしそうに見ているのである。火を入れるとすぐ頭髮が燃え、髪はかたまっている。次に目、鼻、唇、耳など薄肉が焼け、真黒い顔は歯をむき出し、焼けただれた皮膚は肉裂けして白い脂部分の肉が見える。この様は腹這いに体を入れられたために、死骸はのぞけるようになるのである。解剖された死骸を焼く時は、腹の糸がすぐ焼け、中から腸がおどり出て、太くなり釜の中を暴れまわり、ブスッと音をたてて消えてしまうのである。

こんな経験をして一人前の療養者になるわけで、こうしたことには職員は誰れ一人顔を見せなかった。元気な者の仕事であるが、自分の寮の人が亡くなったときは、こうして行方が婦人寮の場合は男の手に委ね他には術はなかった。仏に供える物は炊事から二、三升の米と調味料が出て、お通夜は何よりの御馳走でもあった。本職の坊さんも居らず療友でお経を覚えていた人が奉仕し、各寮の世話役達が出席した。御馳走

のおにぎりにあずかる人はこの人々であった。この葬いも婦人寮の場合、男子寮を三班ぐらいいに分けてその中に組入れられ、こうした時に協力を得るようになった。

この火葬が終ると、□□²¹⁾焼き達はその寮に呼ばれ、特別に御馳走を受ける。その翌朝遺骨拾いであるが、□□²²⁾焼き達は先に出掛けてゆき、釜の扉を開け熱気をとることにつとめる。遺族によっては遺骨を持ち帰る。そのような時は夜が明けない中に遺骨を拾うのであった。遺骨は故郷に帰る。そんな人は生き残る療友を羨しがらせた。ライは死ねば治るという言葉が生まれたのはそんな事からであろう。

大部分は故郷に帰れない。死んでもその哀れさは残る。友や寮員達が遺骨を拾って安置所に置く。阿弥陀堂と言って、現自治会事務所裏の北東に小さな建物があった。

これは戦時中の記録である。

また、岡山の長島愛生園の記録では²³⁾、「作業の変遷」の項に、昭和11年(1936)に日給制から月給制に切り替えられた職種があげられているが、その中に「火葬部等はその特殊性から〔中略〕これに含めた」とあるから、ここでもやはり、軽度の患者の手による火葬が行われていたことが分かる。

終戦直後の療養所は、食糧を求める患者たちによって、戦時中よりもむしろ苦痛な生活のやりくりの日を送っていた。国家の体制が新憲法の発布によって、新時代に向かったの歩みを大きく踏み出した。それでも戦争の痛手は大きく、容易には癒えなかった。一般の社会では敗戦からの立ち直りは意外に早く、それを踏み台に日本経済の全体が高度成長を遂げることになっていく。しかしその結果、ハンセン病療養所には、あらゆる面に大きなひずみがもたらされたことも覆い難い。

終戦後混乱期の栄養不足などによる死亡患者の激増に、各療養所の付設火葬場も新たな対応を迫られる。特に昭和26年(1951)2月、全国らい患者協議会(現・ハンセン氏病患者協議会)が発足し、大半の市民の心の中に宿っている、ハンセン病に対する差別意識の啓蒙活動に多大の功績を果たすことになる。やがて、ハンセン病療養所入園患者の中の死亡者の火葬についての社会の認識も、大きく変わってくる。昭和30年代後半から40年代にかけての時期である。

東京の多磨全生園では、付設火葬場を昭和40年(1965)に廃止していると前項で記したが、翌41年の1月に、例外的に一人の死亡患者を火葬しているのを最後に、府中市所在の民営火葬場を利用することとなる。これは前述の青森の松丘保養園のケースとともに、ハンセン病療養所で付設火葬場を保有していたものが、外部の火葬場に火葬を依頼した初期の例である。以下、多磨全生園の記録を点てつする²⁴⁾。

1966年(昭和41年)

1. 6 永年勤めて来た火葬係が退職、後任が得られず、自治会では施設に対し外部の火葬場で行うよう要請したが、話し合いがつかず紛糾する。

- 22 死亡者があったが火葬の話し合いが依然としてついでないため、遺族らを激昂させた末、園内火葬場で行う。火葬は雇い人夫で謝金 3000 円で行う旨事務部長より園内に放送する。

2. 7 入園者に死亡者があり、今回から府中の都立火葬場を利用することになった。

1978 年（昭和 53 年）

4. 20 主として火葬場行き用にとマイクロバスを購入。近來追悼行事が派手になりつつある中で、火葬場への送りの人数を制限し、自粛することになった。

ここに出てくる「都立」火葬場は誤りである。これは府中市の多磨霊園の東隣に所在する民営の霊安社と称する火葬場で、昭和 61 年に株式会社日華と改称し、現在も重油炉 14 基で操業している。平成 3 年の夏、この女性の専務に、多磨全生園からの遺体搬送を受け入れた往時のことをヒアリングしたことがあるが、「葬儀屋さんを通じて依頼された。私どもはご遺体を差別してはおりません」と、きわめて明快な答えであった。

また、前項でふれたように、その開設当初から付設火葬場を保有しなかった国立駿河療養所と私立の神山復生病院とは、同じく静岡県御殿場市神山の至近地域にあるが、いずれも御殿場市の公営火葬場（現在では、御殿場市・小山町広域行政組合斎場の玉穂斎場公苑、炉数 3 基）を利用している。平成 4 年 11 月 4 日に、この火葬場の火葬技士の H 氏と K 氏から、次のようなヒアリングを得た。上記の 2 か所のハンセン病療養所から、年間平均 5 体ほどの火葬依頼があるという。自分たちが棺を扱うには、職掌上差別観などまったくないが、日本自転車振興会から寄贈された中型バスに乗って、療友だった人たち 20 名ほどが、いつもこの火葬場に同行して見えるが、杖をついたりした身体障害を伴った人たちも多いので、火葬場の待合室で、ほかの会葬者群が奇異の目で見ていることが気にかかるという。火葬作業に従事する人たちの、差別に対する視線は厳しく、問う意味は大きい。

さらに現在では、かつて付設火葬場を保有していたハンセン病療養所の多くは、近隣の地元の公営の火葬場で火葬を行っている。ちなみに、既述の栗生楽泉園は群馬県吾妻郡西部火葬場で、東北新生園は宮城県登米地方火葬場で、菊池恵楓園は菊池葬祭場で、沖縄愛楽園は名護葬祭場で、宮古南静園は平良市火葬場で、私立では身延深敬園が身延町火葬場を利用している。地元の火葬場側が差別と偏見を打破した証左である。

現在も付設火葬場を保有している 4 か所の療養所でも、往時のように軽度の患者を火葬に従事させるというようなことはなくなっている。邑久光明園では会計課福祉室作業係の職員²⁵⁾が、大島青松園では同園が所在する香川県木田郡庵治（あじ）町の町委嘱の人に依頼している。鹿児島県の星塚敬愛園には専従の職員が 1 名いる。また、廃止はしていないが火葬炉から炎が噴き出して危険

なため、現在は使用していない奄美和光園では、火葬技士は不在となっている。

これらの現存するハンセン病療養所付設火葬場の設備を観察すると、近年の一般の火葬場が整備しつつある再燃焼炉は皆無であり、通常の火葬場の技術革新とは無縁である。煙突から煙を出す古い設備の火葬場で、ただ焼けばよい、という旧態依然とした設備であり、歴史的にはさしたる進歩もないし、機能的なほかにゆとりはない。これらのうちで若干注目すべきは、星塚敬愛園の昭和 58 年に新しく完工した鉄筋コンクリート造の付設火葬場は、すでに図—3 で掲出したように、炉前ホールなど告別の場が設けられていること、また、邑久光明園・大島青松園・星塚敬愛園ともに、火葬の燃料には比較的良質で、公害が少ないと言われている A 重油が用いられていることである。

4. 検討と小括

小稿における以上の考察の結果として、何らかのかたちで計画への見通ししないしは示唆の提出をしておく必要がある。

小稿でまず明らかにできたことは、今日、ハンセン病療養所付設火葬場が、一つの画期と言うか変革期をむかえているという明確な事実である。

（1）付設火葬場を存続するケース

従来は、療養所敷地内の片隅に設けられていた例が多い。これは山村・離村などにみられるものと軌を一にしている立地である。それは野辺送りをするにふさわしい距離を選んだとも考えられ、また「嫌忌」の志向が療養所側に強く働いて、隅の方に追いやったものと考察できる。

かつては全国に散在していた結核療養所にもあった付設の火葬場も同様であったが、このような火葬炉 1 基程度の療養所付設の小規模火葬場の系譜は、近世から近代初頭にかけて、わが国の各地の集落や寺院でみられた野焼きの習俗を考えてよい。それに加えて、ハンセン病という限定された人の遺体が、療友といういわば「身内」の人たちによって見送られるという意味が付加された。こうした系譜を踏襲していると考えられる火葬場として、本来は限定された人たちが火葬される施設であっても、今後は何よりも、開かれた火葬場でなくてはならない。

小稿の中でみたように、間取りは、炉前ホール（遺体安置所・荘厳堂も含む）があって、炉の裏側に作業所があるという、小規模なものであり、今後の計画上は一考を要する。

火葬を見送る療友たちが、心をこめて遺体と最後の別れをする炉前ホールとして、余裕のあるスペースを持ち、天窗などから自然の明るい光を採り入れるような配慮が

要求される。

火葬炉もまた、前室（冷却室）付きの再燃焼炉を完備した、最新技術を駆使する清潔な火葬炉を備え、見送る療友たちに汚染された炉内を望見させて、いたずらな不快感や恐怖感を与えないような計画が求められる。

拾骨に際しても、身体障害を伴った療友が多いことを考慮することが第一で、現在の存続しているすべての付設火葬場の設備では、炉前に引き出される骨受台が非常に高温で、身体の不自由な療友の拾骨が危険である心配がある。拾骨台の台車も、上下の作動ができるものを使うべきである。このためにも、炉前ホールには十分なスペースを求めたい。それにより、炉前ホールのコーナーには祭壇設備を置き、移動式椅子を用いることにより、簡単ながら通夜や葬儀のできる空間として計画してほしい。

建物も、小稿で言及した星塚敬愛園のように鉄筋コンクリート造りとし、病者の会葬者を考慮した防災設備・避難路などを十分に考えた計画が必要である。

こうして最新の設備さえ完璧であれば、従前のように療養所敷地内の片隅に追いやる意味も薄れてくるはずである。

さらに、付設火葬場には、待合室が皆無であるが、火葬時間中に故人をしのびつつ談話できるような、ゆったりとした待合室を火葬場に併設すべきである。会葬者療友のマイクロバスによる療棟からの往復も考えられるが、やはり落ち着いた雰囲気、身体障害者用のトイレの設置などを含めて、福祉用の設備に留意した待合室の併設計画が望ましい。

要は、付設火葬場は、限られた、知り尽くした療友を火葬する場所の典型として見直してほしい。そのうえで、病者の心を沈思させない設備であることは言うまでもない。

（２）近隣の火葬場を利用するようになったケース

療養所が付設火葬場を廃絶したために、ハンセン病療養所からの遺体を受け入れるケースが増えた、近隣の地方自治体や民営の火葬場の計画のあるべきようを示唆しておきたい。

まず、こうした火葬場にあっても、上述の（１）の末尾のパラグラフに記した課題の延長線上にあることを、常に心がけるべきである。

小稿で言及した御殿場市の火葬場の火葬技士たちの証言の例を省みるまでもなく、火葬場内で、健常者の会葬者群と、ハンセン病療養所からの療友たちの会葬者群の存在が、違和感のない計画をすべきである。

そのためには、火葬炉の配置計画は、いくつもの炉を単純に並べることをやめ、京都市中央斎場の優れた計画のように、いくつかのブロックに火葬炉をまとめ、別れと拾骨の営為が、他の会葬集団からほぼ独立して行われ

るようにすべきである。

また、待合室は、限定された人たちが、他集団と会わずに休めるという計画であってほしい。それには、東京都区部の民営火葬場にみられる特賓室のような計画が考えられる。それは、年に何回か、ハンセン病療養所から会葬に来る人たちのために利用されるだけでなく、一般の会葬者用に使うべきである。当然、そこを利用する会葬者から、東京都区部の民営火葬場の特賓室のように高額の料金を徴収することはあってはならない。あくまでも個別化に重点をおくための計画である。

ともあれ、近い将来、ハンセン病療養所は、高齢化現象によって、超高齢者施設、そして障害者の療養施設に変化していくものと考えられるが、そのときの策定の一部に、火葬場対策をも真剣に考慮しなければならないときが到来している。

差別と偏見を克服しても、火葬場をめぐる計画に、けん怠と無関心を生みださないように求めたいというのが、この小稿のつたない真意なのである。と同時に、今日の差別や偏見の問題に、建築学をめぐる研究も、誠実にかかわる必要があるのではないかと省みる。

注

- 1) 1841～1912。ノルウェーの医学者。1871年に、らい菌を発見した。
- 2) アメリカのファジェーが1943年9月に創製している。わが国で使用が開始されたのは昭和22年（1947）からである。
- 3) 厚生省保健医療局国立療養所課の資料による。
- 4) 1876～1964。昭和6年（1931）～32年（1957）、長島愛生園長。昭和26年（1951）、文化勲章を受けている。
- 5) 原田勇雄：『この世の外れ』、筑摩書房、p.286, 1992
- 6) 初版が刊行されたのは昭和13年（1938）、映画化は昭和15年（1940）であった。
- 7) 三宅一志：『差別者のボクに捧げる！』、晩聲社、p.10, 1978
- 8) 注5前掲書、p.286
- 9) 注5前掲書、p.282
- 10) 厚生省の呼称は、現在でも「らい」を使用している。
- 11) 島比呂志：『片居からの解放—ハンセン病療養所からのメッセージ』、社会評論社、1985 所に収められた資料1と泉真蔵「日本のハンセン病はもはや“伝染病”ではない」、同書 pp.156～160 による。
- 12) 注3に同じ。
- 13) 『秘境を開く—そこに生きて七十年—』、松丘保養園七十年記念刊行委員会編、北の街社、p.277, 1979
- 14) 『俱会—処一患者が綴る全生園の七十年—』、多磨全生園患者自治会編、一光社、pp.273～274, 1979
- 15) 注14前掲書にも、「昭和51年12月10日、火葬場跡二箇所に記念碑『のぞみの園』〔中略〕が建てられ、除幕式を行う」（年表 p.110）とある。
- 16) 『隔絶の里程—長島愛生園入園者五十年史—』、長島愛生園入園者自治会編、日本文教出版、p.309, 1982
- 17) 『風と海のなか—邑久光明園八十年のあゆみ—』、邑久光

写真—10 神山復生病院の門扉に掲げられている十字架（平成
4年11月4日）

明園入園者自治会編，日本文教出版，p. 12，1989

18) 注 17 前掲書，p. 204

19) わが国最古のハンセン病療養所であるこの病院の，十字架が掲げられている開設当時よりの門扉が写真—10である。また，この療養所の初期の院長に，カトリック司祭であり，哲学者の九鬼周造にカトリックの感化を与えた岩下壮一がいた（田中久文：『九鬼周造』，ペリカン社，pp. 25～26，1992）。

20) 差別用語を使用しているので，伏せ字とした。

21) 注 20 に同じ。

22) 注 20 に同じ。

23) 注 16 前掲書，p. 196

24) 注 14 前掲書，年表 p. 92 および p. 113

25) 長島愛生園と共同使用であるが，長島愛生園が火葬を行う場合には，同園の職員が火葬に従事している。

（1992 年 12 月 28 日原稿受理，1993 年 5 月 11 日採用決定）